あの道あの景色

長い雨がしばらく続いた日々の後で
いつの間にか夏も過ぎ去っていた
ふと見る遠くの灯り　冴え渡り届く
すっかり冷たくなる早い夜の訪れ

夕闇　降りてきた静かに
誰も通らない坂道
思い出されるあの道
「また明日」と手を振った

思い出すことしかできない
あの道のあの景色の中
戻らない時　置き去りにして
心がそのまま止まっている

アスファルトの隙間からスズメノカタビラが
草刈りした後　元気に伸びていた
ふと見る近くの灯り　オレンジに光って
寂しく影を引きずる早い夜の訪れ

秋雨の匂いを感じて
胸の奥　チクリと痛む気がした
思い出されるあの道
「また明日」と手を振った

あの夏の引き返せない季節
あの道のあの景色の中
今はもう思い出すだけ
並んで歩いたあの道

戻らない時　置き去りにして
心がそのまま止まっている

途方もない時間

まだほとんど何も知らなかった日々が

地下鉄の延長の高架を走る電車
ビルの隙間から光る緑の中に

昔の終点の千里の丘から
ひとつ前の駅　向かって歩く

時を超えても落ち着いた風景
思い出すあの頃の期待と不安

途方もない時間ゆるやかに景色を変え
若かったあの頃にタイムトリップ

時代のページめくりながら
懐かしい軌道をたどってる

昭和の終わり　遠い日のざわめき

新御堂の真ん中　高架を走る電車
ビルが建ち並ぶ駅に戻ってきた

現実に戻る新大阪から
二つ前の駅　降りて歩く

いつも立ち寄るギターの店で
久しぶりに眺める類稀なもの

途方もない時間ゆるやかに好みを変え
若かったあの頃より深みを求めてる

時代のページめくっても
大切な記憶は色褪せない

まだほとんど何も知らなかった日々が
昭和の終わり　遠い日のざわめき

冬支度

庭木まとっていた緑　　脱ぎ捨て
厚手のあったかい靴下　　引っ張り出し
そっと襟を立ててすする　マグカップ
熱いラテの湯気が　　白く窓をかすめ

これまでに過ごしてきた　今過ごしてきた
賑やかな時が
遠ざかる寂しさの
なかで巣篭もりの準備

ひんやりと
　　ひんやりとした庭の隅の中で
この頬に
　　この頬にあたる次の季節の風

心を澄ませて整えてゆく

重たい荷物を手放して　　そっと
この身も心も軽くして　　そして
残された時間愛おしんで　行くために
勇気を確かに持って　　行こう

これまでに歩んできた
足跡を信じる
訪れる未知の静寂
踏み出す一歩の準備

たくさんの
　　いくつもの長い年月を重ねて
過ぎた日々
　　その後に訪れる静かな孤独

心を澄ませて整えてゆく

厚手のカーテン閉めたなら　部屋の中
揺るぎない灯りがともる　　さあこれから
そこにある冬を迎えに　　行くために
あったかな心を持って　　行こう

金色の風

坂道を白い車が
梢のトンネル息を弾ませ

ほんの少し窓を開ければ
金色の風そっと　髪をかすめて
小刻みなカーブ　登ってゆくたび
色づく木の葉　体を揺らし
笑ってるように流れるように
この心も撫でてゆく

これからゆくみち
知らないけれど
このままこの風と
走っていたい

坂道を白い車が
梢のトンネル息を弾ませ

山深くなり静寂が広がる
金色の風　そっと冷たくなって
小刻みなカーブ　少なくなって
明るくなってきた途端
ご褒美のような開けたところ
この心を弾ませてゆく

これからゆくみち
知らないけれど
このままこの風と
走っていたい

坂道を白い車が
梢のトンネル息を弾ませこちらが

冬枯れの道端

強い北風が吹き積もる前の雪が
すっかり飛ばされた黒い道に
どこからか飛んできた
数枚の若い落ち葉
地上に落とされてためらいがちに

あと一枚だけになったカレンダー
いろんな　かかわり少なくなった今は
過ぎ去る　今年の少なさ感じる

寒さにも負けずに冬枯れの道端の
ここに咲く小さな花　何ていう花かな

強い風にあおられて舞い上がる落ち葉が
乾いた音を立てて転ぶ脇の
歩道の隅っこに
積もった古い枯葉
行き場を失って申し訳なさそう

賑わい横目で見る　イベント
いろんな関わり少なくなった今は
楽しむ　ことよりさみしさ感じる

寒さにも負けずに冬枯れの道端の
ここに咲く小さな花　何ていう花かな

けなげな姿に勇気づけられて
やるべきこと見つけ　Todoリストに

強い北風が吹き積もる前の雪が
すっかり飛ばされた黒い道に
どこからか飛んできた
数枚の若い落ち葉
地上に落とされてためらいがちに

ひだまりの中

ひだまりの中に
長い影が伸びて
小春日和の道
帰り花を見つけた

咲くはずのない季節に
わずか三輪ばかり
儚いほどの美しい姿に出逢って

ひだまりといえども
時折ふく冷たい風
それを忘れさせるような
暖かなきもちに

咲くはずのない季節に
ほころぶつぼみ見上げる
こんな僕にも春がいつか来るよと

いくつもの冬を迎えて

いくつもの春が過ぎ去って
いくつもの夏が終わって
いくつもの秋を感じて
いくつもの冬を迎えて

人は皆　少しずつ忘れてく　記憶の中で
大事な何か　掴んでは生きてゆくのだろう

あの日の空の色も　聞こえてた笑い声も
今では頭の隅　淡く揺れてる

若かった日々の夢はいつしか形を
変えてしまったけれど　消えずに残っている

いくつもの春が過ぎ去って
いくつもの夏が終わって
いくつもの秋を感じて
いくつもの冬を迎えて

雪が降るある朝には　懐かしい人の面影
風が吹く冷たさに　過ぎた季節感じる

あの日に戻るのでなく　あの日があったことを
静かに抱きしめて生きて行きたい

枯れ枝の先に小さな芽吹きが宿る
人の心もまた新しく変われる

私は今日も白く染まる道を
まだ見ぬ春があると信じて歩いてゆく

いくつもの春が過ぎ去って
いくつもの夏が終わって
いくつもの秋を感じて
いくつもの冬を迎えて

ラララ